

*主への感謝が乏しい私たち

「祈り」とは、私と生ける神様との会話である、と言われる。どのような会話をしているだろうか。私たちは自分のために、兄弟姉妹のために、熱心に祈る。特に自分の事は熱心に祈り求めるかもしれない。しかし、今日の問題は、祈り求めが聞かれた時に、主に感謝をしているだろうか、ということだ。

今日の聖書箇所、主イエス様は 10 人に会うためにある村に入られた。10 人は、イエス様の素晴らしい奇跡の御業を聞いてイエス様を迎えたが、遠く離れて立っていた。彼らはツァラアトに冒されていたからだ。

*10 人の信仰

「ツァラアト」は、日本語に翻訳すると、当てはまる言葉がない。昔は「らい病」と訳したり（新改訳第二版）、「重い皮膚病」と訳したりする聖書（新共同訳）があった。今は「ツァラアト」と表記するのは、現代の医学の中で、病名を特定することは難しいからだ。当時は治すことが難しく、汚れているとされた病であり、とても恐れられ、冒された人は隔離された。このツァラアトは神様に仕えている祭司が最終的に治ったかどうかの判断をして、隔離を解くことになっていた。10 人の患者は「私たちをかわれんでください」と声を張り上げた。イエス様は「祭司に見せなさい」と命じられて、癒されて社会復帰できる希望を与えた。10 人はそうなることを信じて祭司の所に向かった。祭司に会うために約三日の道のりが必要だったという。その途中、全員が癒されたのだ。

*数えてみよ、主の恵み

ところが 10 人の内、たった一人、サマリア人の一人だけが大声で主をほめたたえながら引き返して来た。癒された 9 人も大喜びしたはずだが、早く祭司に見せて、家族の元に帰りたい、そして仕事に戻りたい、そんな気持ちが強くなっていたのだろう。私たちの内にも、感謝を忘れて現実問題に追われてしまう 9 人と共通するところがあるかもしれない。実は、主イエス様はそんな 9 人にも御目を留めて下さったのだ。

感謝を表わしている一人に「9 人はどこにいるのか」（17 節）と聞いて、関心を示された。これは、主をほめたたえ、主に感謝することを忘れていた 9 人への、いえ、感謝と賛美の乏しい、私たちへの呼びかけではないかと、聞こえてくる。この書をまとめたルカ自身の熱い思いも込められているだろう。「イエス様から、とんでもない恵みを頂いているあなたは、いったいどこにいるのか？」と。

私たちは、熱心に祈ったとしても、主の答えをよく聴きもしないで、立ち去る、と言うことはないだろうか。「祈る熱心さに比べて、感謝が乏しい」ことはないだろうか？

主から頂いた恵みを、今日もう一度、思い起こそう。日々の祈りを聞いて下さり、「ああ、あの時の願い求めが聞かれていた！」と気づいたならすぐ感謝しよう。何よりも、罪の中にあつた私たちの必死な叫びを、聞いて下さり、聖めて下さった主のご愛を思い起こし、もう一度、引き返して感謝しよう。もし、感謝しきれないほどの恵み（救いの恵み）をまだ頂いていない、という方がいるならば、「主よ、私を憐れんで下さい」、「主よ、お救いください」と、主イエス様に憐れみを求めることをお勧めしたい。主はあなたの叫び求めを待っておられる。

「わがたましいよ 主をほめたたえよ。主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」（詩篇 103:2）